

## 【書評・紹介】

高倉 浩樹 編著 『極寒のシベリアに生きる—トナカイと氷の先住民』  
(東京, 新泉社, 2012年4月, A5判, xii+257頁, 2500円+税)

平田 昌弘

新しい学問領域の創造—。既存の学問の枠組みに不十分さを感じ、新たな視座の必要性和責任性を感じる才ある研究者なら誰も試みる新たな地平線だ。編著者の高倉浩樹氏は、本編著本は北方極寒シベリアの入門書としているが、その内心はこの新学問領域の創造・提起に焦点が置かれている。

温暖化という現象を契機に、攪乱を含んだ動き続ける自然環境とこれに適応し続ける社会・文化のあり方をシステムティックに捉えようとする学問領域を高倉氏は開拓・提唱しようとしている。温暖化により自然環境は変動する。決して固定した背景ではない。自然環境の変化に伴って、人びとの生活は適応・変遷し、社会や文化の仕組みも再編・更新される。この両者の動態を体系的に捉えようとしているのである。これは、非常事態が集結するまでを対象としている災害研究とは異なる。また、自然をいわば背景とみなしてきた、もしくは、一定の恒常性を持つものと見なしてきた人類学とは異なる。自然と社会の温暖化による再編・更新を継続的な動態として捉えようとしている。この観点において新しさがある。

また、本書を通じて伝わってくる高倉氏の問題意識として、学問が学問界内で留まり、その成果が社会に還元され難いことに対する危惧感がある。この閉塞感からの脱却についても、高倉氏は温暖化問題が契機になると主張する。温暖化問題は、学知と社会が新しい形で結び結ばれる契機を提供するとしている。温暖化問題の研究成果の検討の場にも地域の住民に参画してもらい、温暖化に対してどのように対応していくべきか共に考え、その成果の地域社会への適応法を地域住民自らが構想できる仕組みが実現可能であるとしている。そして、温暖化問題には、空間的に離れている社会同士であっても、共感を持って理解しあえる機会でもとしている。温暖化問題は、遠い異国での災害や異常気象であっても、それが自分たちと無関係ではないという共感を伴う。この研究成果の地域還元と相手を深く理解させるための共感性とが、温暖化問題には内包し、学問を進展させるとしている。

更に、温暖化の研究は、地域研究や文化人類学と気候変動の科学とが結びつくとしている。自然科学は現地観測やモデル解析により気候変動の現状を数値的に把握し、また、将来予測する。社会科学は、その気候変動がどのように地域の生態や社会に影響が及ぶかについて正しく理解することができる。つまり、温暖化問題は、文系と理系の双方の研究が必要であり、必然的に文理融合が求められている領域なのである。

新しい学問領域の創成と学問成果の社会還元、そして、文理融合という大きな課題群が文章中に錯綜し、文脈を分かりにくくしている感もある。しかし、高倉氏の北方極寒シベリアへの熱い気持ち、温暖化という問題意識とその対処の必要性とは十分に読者に伝わってくる。この

表紙画像

ような高倉氏の前提のもと、本編著本は7人の文系と3人の理系の研究者によって執筆されている。シベリアの温暖化問題に対処するためには、寒冷地の総合的理解が必要であるとしているため、このような理系研究者と文系研究者による構成となっている。本編著本は以下の章立てで構成されている。

序章 極寒のシベリアに生きる人々—シベリア理解への視角 高倉浩樹 (社会人類学)

## I 人類とシベリア

第1章 人類のシベリア進出—多様な生存・適応戦略 佐々木史郎 (文化人類学)

第2章 トナカイ牧畜の歴史的展開と家畜化の起源 中田篤 (人と動物の関係学・北方人類学)

第3章 シベリアのロシア人 藤原潤子 (文化人類学・ロシア研究)

コラム1 シベリアの諸民族 吉田睦 (文化人類学・食文化論・シベリア先住民研究)

資料1 シベリアに暮らす諸民族一覧

## II 極寒環境と社会

第4章 極北・高緯度の自然環境 檜山哲哉 (生態水文学・水文気象学)

第5章 氷の民族誌—レナ川中流域サハ人の知恵と生業技術 高倉浩樹

第6章 シベリアのトナカイ牧畜・飼育と開発・環境問題 吉田睦

第7章 毛皮獣の利用をめぐる生態系保全と外来生物問題 池田透 (保全生態学)

第8章 氷の上の道路交通 奥村誠 (土木計画学)

コラム2 途絶環境化するシベリアの村—ソ連崩壊と温暖化 藤原潤子

## III 先住民の言語と宗教

第9章 先住民言語の多様な世界 氷山ゆかり (言語学)

第10章 シャマニズムをめぐる神話と世界観 山田仁史 (宗教民族学・神話学)

終章 シベリアの温暖化と文化人類学 高倉浩樹

資料2 シベリアをさらに学びたい人のための文献案内

編著本は、多分野の専門家が多様な論文を寄稿するため、統一性がとれにくい。一つの作品とするため、どのように筋道をたてるかが編著本の生命線となる。そこで本編著本は、極寒を前提にする社会と文化の仕組みを先ず紹介すること、そして、地球温暖化によってどのような影響が起こっているかを把握・共感してもらうことを共通テーマとし、統一のとれた編著本となるよう試みられている。

シベリア南方域に初めて進出したネアンデルタールから、多種の道具類を生み出して多様な極寒環境に適応していったホモ・サピエンスへの交替劇についての佐々木氏の論考は、極寒地ではあるが、実は生態資源は豊かで、新たに生み出す資源利用戦略(道具という文化)によって人類が適応していった諸相を説明しており、正しいシベリア理解に導いていく。トナカイ牧畜の技法や、これまでのトナカイ牧畜起源論についてまとめつつ、独自の起源説を提案する中田氏の論考は、シベリア以外で牧畜研究をおこなう者にとってもシベリアでの牧畜研究の扉を大きく開いてくれる。藤原氏は、シベリアでのロシア人と北方少数民族の重層性と民族概念の流動性について、具体的事例を示しつつ見事に描きあげている。高倉氏の氷を土台とした生活とその季節利用性についての説明も、読むに従ってワクワクさせられていく。シベリアの諸言語の状況を説明した永山氏の概論では、その多くが消滅の危機に瀕している状況が切実に伝わってくる。永久凍土上にカラマツ林が自生する理由、カラマツ林帯にスポット的に草

原が形成される構造、そして、有機物を溜め込んだシベリア湿原とその脆弱性など、檜山氏の解説文にはシベリア自然環境について多くを学ばせてくれる。

各章の論考は限られた字数ではあるが、専門的な知識と理論とを下敷きにしているため、それぞれに深淵な内容となっている。対象分野は、歴史人類史、トナカイ牧畜、多民族共生、自然環境、氷との暮らし、生態系保全、極寒利用の道路交通、諸言語、シャマニズムの多領域に亘っている。本編著本は確かに、北方極寒シベリアにおける社会と文化の理解へと導いてくれている。読者は、北方極寒シベリアについての理解が随分と深まる。本編著本の一つの目的は確かに達成されている。ただ残念なのは、北方極寒シベリアの理解の先にある温暖化問題とは必ずしも関連づけられて各章で述べられていないことである。地球温暖化によってどのような影響が起こっているかは各章で具体的には説明されておらず、十分に把握・共感することができていない。また、高倉氏の問題設定としての新しい学問領域の創出についても、その具体的な内容へは言及されておらず、提言までに留まっている。本編著本の位置は、北方極寒シベリアの深い理解を提供する総合的解説書、そして、特に北方極寒シベリアで進行しつつある温暖化問題を契機とした新しい学問創出と共感性の彷彿による深い相互理解への提唱にあらう。

本編著書を読み終える際、北方極寒シベリアに実際に訪れてみたくなることであろう。本編著本で説明されている北方少数民族の暮らし、氷を土台とした生態環境と人びとの生活技法、トナカイ牧畜に出会いたくなる。本編著本は、そんな北方極寒シベリアの魅力を伝えている。

#### 参考文献

石川栄吉、梅棹忠夫、大林太良、蒲生正男、佐々木高明、祖父江孝男編著

1994『文化人類学事典』広文堂

佐々木史郎

1991「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域—レーヴィン、チェボクサロフの「経済・文化類型」と「歴史・民族誌的領域」の再検討—」『国立民族学博物館研究報告』16(2): 261-309.

高倉浩樹

2012『極北の牧畜民サハ—進化とマイクロ適応をめぐるシベリア民族誌』昭和堂

吉田 睦

2003『トナカイ牧畜民の食の文化・社会誌』彩流社

(ひらた・まさひろ／帯広畜産大学)